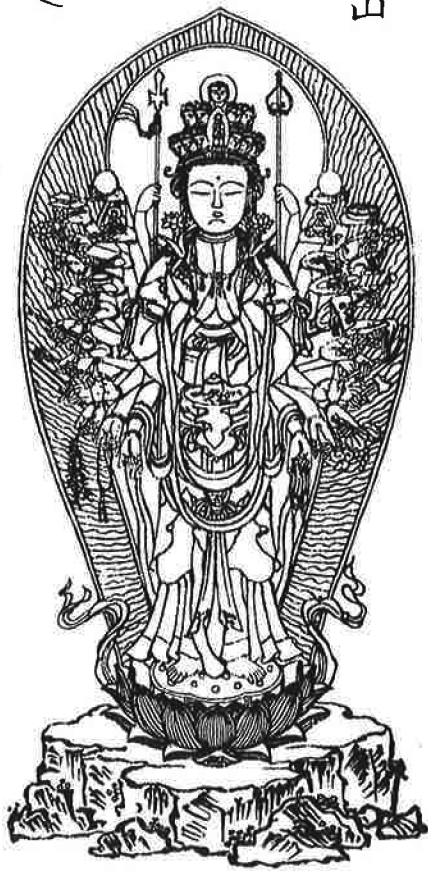


坂東十九番
札處天開山

名を聞くも、めぐみ大谷の
観音もたゞ
一箇め
かみよ



野州大谷寺

狩野貞信筆

大谷観音御影



大谷寺全景 石塚晃溪先生筆

大谷寺本尊千手観音は、弘仁元年（平安時代初期）弘法大師の作と伝えられ、一般に古くから大谷観音と称され、鎌倉時代には、坂東十九番の霊場に定められ、多くの人々から尊崇されて来ました。

なお堂内岩壁面に厚肉彫に彫刻されている十軀の石仏は、わが国石像彫刻中、最優秀なる技工をきわめたものとして、昭和二十九年三月、特別史跡及び昭和三十六年六月には、重要文化財のわが国最初の二重指定を受けたものであります。

坂東十九番御詠歌

名を聞くも、めぐみ大谷の観世音

みちびきたまへ、知るも知らぬも

この詠歌について、昔、承安年中、（今から八百年前）、三河国、吉田の城下に、貧しい農夫が住んでおりました。年も四十を過ぎた頃、一人の男の子を得、名を源三郎と名付け、夫妻はこのほか喜び、楽しい月日を過ごしておりました。時に源三郎三才の折、父は眞役のため鎌倉に下り、数年の才月がながれ、その間、そこで知り合った女性と恋におち、ついに彼女の古郷の下野国、宇都宮に至り、同棲、故国の妻子を忘れて暮らしておりました。

三河国の妻子は、それとも知らず、毎日父の帰りを待つておりましたが、何んのためもなく、その子十一才の秋の末、とうとうお母さんは、病にかかり、死んでしまいました。一人ぼっちとなつてしまったその子は、土地の鎮守様へ日参して、私の父がこの世におりましたなら、どうか逢わせて下さいと、一心に願いをかけて頼みました。やがてその子の願いも神様に通じ、父に逢おうとするなれば、下野国、宇都宮に下り大谷の観音に祈るべしとの告がありました。時にその子十二才で、それより乞食をしながら下野に下り、大谷観音に参詣して、早く私の父に逢わせて下さいと、一生けん命に祈りました。その子の一心の願いも観音様に通じ、或る夜、観音様が僧の姿となつて、その子の寝ているところに現われ、参詣する人々にめいめい、名を聞き、国を問い尋ねれば、遂には父に逢うべしと、その子は言われるままに昼は乞食して、飢えをしのぎ、夜は御堂の外にて観音様の名を唱え、毎日参詣の人々に名を聞き、国を問い。その子の様子を見た、何を知らない里の人たちは、あの子は氣違いではないかと、あざける人すらおりました。

やがてその年も暮れ、明けて正月十六日の夜、観音様がまた夢に告げて言うに、明日南の街道（昔は宇都宮より大谷への正街道であった。）より、多くの人たちが参詣する中に、必ずお前の父がおりますと、ふたたび知らせがありました。源三郎は大変喜び、明くる十七日の早朝より、南の門外を往来して、おし合う中に、その子の足元に、一人つまづいて倒れた人がおりました。源三郎何気なく助け起して、例の様に名を聞き、国を問いました。顔はお互い解からないが、まちがいなくそれがわが父だったのでした。

二人の嬉しさは、言葉では言い様のない、しばらく前後を忘れ、なき合い、観音様のみちびきによって、逢うことが出来たことを喜びあつて、二人は心から香花を供養し、二人ともども吉田へ帰られました。その姿を詠じられたのが、この御詠歌であります。